ネイティブ呪縛から解放する

脱TOEIC至上主義の企業と大学

ビジネス英語は、清く正しく美しく話さなければならない――。日本人の口元をこわばらせている、そんな意識からの解放に、積極的に取り組んでいる企業や大学がある。大切なのは、自分の英語にもっと自信を持つことだ。

午前8時、まだ静まり返っている会社の一角に、コーヒーカップやノートパソコンを手にした社員たちがぽつぽつと集まってきた。都内のレーザー機器専門商社、日本レーザー。火曜朝恒例の「社長塾」の始まりだ。

「日本で、旅行はしましたか？」

近藤宣之社長(70)が、ゲストとして参加したインターンの米国人学生に英語で話しかける。駐在員として米国で9年間暮らした近藤氏は、英語でのやりとりに不自由はない。北海道を旅したと学生が答えると、近藤氏は「さあ、どんどん聞いて」と、社員たちに質問を促した。

「クマに遭わなかった？」

「旭山動物園には行った？」

英語のQ&Aが途切れることなく続く。テレビ会議システムでつながる名古屋と大阪の両支店の社員も含め、この日参加した9人の会話はすべて英語だ。

こと英語でのやりとりだと、借りてきた猫のようになりがちな日本人。でも実は、話の流れを把握し、言いたいこともあり、単語や慣用表現だってそこそこ知っている人は少なくない。そんな人が英語を話すうえで必要なのは、一歩踏み出す心意気と、ちょっとした発想の転換だ。

プライドが妨げになる

「完璧にしゃべろうとか、間違えてバカにされたくないといったプライドが、コミュニケーションを妨げている。日本人は周囲、特に周りの日本人にどう思われるかを気にしすぎです」

そう話す近藤氏は、6年前に「社長塾」を始めた。1回1時間、とにかく英語をしゃべり、自信をつける。

「きれいな英語を使いたい気持ちはありますし、そのために努力もしています。でも、例えば海外からの電話に対しては、言い間違いを恐れず相手の用件がわかるまで確認し、最適な人にきちんとつなぐといった、目的を果たすことが大事だと考えるようになりました」(入社11年目の江田弥生さん)

コピー機などを多くの国々で製造・販売しているリコーも、社員の英語運用力向上では、メンタル部分の強化が必要と感じている企業の一つだ。

とにかく英語をしゃべり、自信をつける

日本レーザー「社長塾」

7月下旬の社長塾。約60人の社員が数グループに分かれ、3カ月交代で参加する。英語力強化に力を注ぐ同社では、大半の社員が参加しているという

photo 田村栄治

「TOEIC700点でも仕事で英語を使えない、800点でも出張で話せない、といった話が、あちこちから聞こえてきた」(加藤直子・人材開発部長)

そこで同社は昨年から、場面を設定して英語で発信する研修を増やしている。交渉、プレゼン、テレビ会議、電話、メール……。それらを疑似体験させることで、実際の場面での緊張を和らげ、英語が口をつきやすくすることを狙っている。社員同士が数人単位のグループを作って、英語学習に費やした時間を競い、上位には電子書籍リーダーなどの賞品が贈られる。

場数を踏んで自信に

「昨年の初めてのアメリカ出張では、緊張や恥ずかしさで頭が真っ白になり、会議の司会を最後まで務められなかった。その後、研修などで場数を踏むことで自信がつき、3回目となる今年5月の出張では、自分の言葉で仕切ることができました」(入社10年目の辻谷友佑さん)

ビジネスの場では、学校で習ったのとは違う独特で「高級」な英語を使わなくてはならない――。そんな誤解も、心理的なハードルを高めやすい。

「『ビジネス英語』という特別な英語はありません。商談も雑談も、目的は相手を理解し、自分の考えを伝えることであって、そのとき使う単語や表現は平易なもので構わないんです」

そう話すのは、企業などで人材育成研修を開いているユニバーサル・ブレインズの笈川義基社長(62)だ。複数の外資系企業に長年勤めてきた経験から、今ある語彙で、胸を張って言いたいことを言い切るのが重要だと主張する。

心の壁の除去に取り組んでいるのは、企業だけではない。

近畿大学の「英語村E³[e-cube]」。最近増えつつある〝英語カフェ〟と呼ばれる大学内スペースの先駆けで、2006年11月に開設。明るくおしゃれな館内に、英語が母国語のスタッフが常駐し、学生は好きな時間に立ち寄り、英語でおしゃべりを楽しめる。本棚には英語の漫画や雑誌が並び、英語で注文をするカフェスタンドもある。

遊びながら楽しく学ぶ

「日本人が英語を学ぶときに壁になるのが、間違った英語を使うと笑われるかもという恐怖心です」

英語村に携わる、北爪佐知子教授(コミュニケーション論)はそう指摘する。その恐怖心を取り除くため、英語村では「遊びながら楽しく英語を学ぶ」方針を強調。ゲームや菓子作りなど、学生が参加しやすい日替わりの活動も用意している。

今年6月に、英語村を利用している学生1千人に大学がアンケートをしたところ、「以前に比べて海外の人に話しかけられても抵抗がなくなった」と答えた人が9割近くに上った。また、「英語を勉強しなければならないと感じた」と回答した学生は、ほぼ全員に近い97%という高比率だった。一方、海外の大学へ留学する学生数も、05年度は72人だったが、13年度は597人に急増したという。

話すときは大胆に

「英語村が果たす役割もますます大きくなると考えています」(北爪氏)

英語を話すとき、気後れを生みやすいのが、ネイティブと自分の英語の差異から感じる「引け目」だ。立教大学の鳥飼玖美子特任教授(言語コミュニケーション論)は、この意識の解消こそ必要だと説く。

「発音や表現が母語に引きずられるのは当然。でも、意味が通じれば、それでいいんです。日本人以外の、英語が母語ではない人たちも、みんな独特の英語を使っています。英語は英語圏の言葉ではなく、『国際共通語』。大事なのは、流暢に話すことではなく、相手にわかってもらうこと。『ネイティブの呪縛』から解放され、自分の英語にもっと自信をもつべきです」

ただし、ハチャメチャな英語では、コミュニケーションが成立せず、正式な文書だと信用問題につながりかねない。鳥飼氏は話す。

「きちんと学び、話すときは大胆に、です」

ライター 田村栄治

朝日新聞出版 海田 文

好きな時間に立ち寄り、英語でおしゃべりする

近畿大学「英語村E³」

学生のレベルアップに合わせ、最大5人の学生にスタッフ1人がつき、その日のニュースなどをテーマに30分間、ディベートやディスカッションをするプログラムも昨年、スタートした

メンタルの壁を引き下げるための5カ条(今回の取材から)

1. 他人にどう思われるか気にしない
2. 間違うのは当たり前と開き直る
3. 「ビジネス英語」を特別な英語だと思わない
4. 英語を使う目的を意識する
5. ネイティブの英語を崇めず、日本語なまりの英語に自信をもつ

photo 写真部 東川哲也